

## 第67回新潟画像医学研究会

日時 平成24年10月20日(土)  
午後2時～  
会場 万代シルバーホテル 5F  
万代の間

## 2 頭部MRI造影FLAIR法が有用であった結核性髄膜炎の1例

若杉 尚宏・黒羽 泰子・長谷川有香  
谷 卓・松原 奈絵・小池 亮子  
桑原 克弘\*・安住理恵子\*\*

国立病院機構西新潟中央病院  
神経内科  
同 呼吸器内科\*  
同 放射線科\*\*

## I. 一般演題

## 1 梅毒性脊髄炎のMRI画像

相馬 規子・梅田 能生・梅田麻衣子  
小宅 睦郎・藤田 信也

長岡赤十字病院神経内科

症例は38歳、男性。歩行障害、両下肢の脱力感、下半身の感覚低下、膀胱直腸障害、背部痛を主訴に入院した。脊髄MRIでC3～Th10と広範な脊髄の腫大があり、T2強調画像で内部は均一な高信号を呈していた。また、ガドリニウムでは脊髄辺縁の一部が斑状に造影された。5～6年前から不特定多数との性行為があったことが判明し、血清検査と髄液検査で梅毒反応が陽性で、神経梅毒による横断性脊髄炎と診断した。プレドニンを併用したペニシリン大量点滴療法を行い、髄液検査、臨床症状ともに改善が得られ、治療後の脊髄MRIでは、T2高信号病変やガドリニウム造影病変はほぼ消失していた。MRIで広範な脊髄病変を認める場合、脊髄動静脈奇形や視神経脊髄炎、悪性リンパ腫などのほか、梅毒性脊髄炎も念頭に鑑別を進める必要がある。

症例は68歳、女性。

【主訴】頭痛、発熱。

【現病歴】X年4月に関節痛、頸部痛や発熱が出現、その後入院したが、頭痛頸部痛増強、軽度意識低下、髄膜刺激徴候がみられた。髄液所見は単核球、蛋白の増加とADA 21 IU/lがみられ、結核菌の培養、PCRが陰性であったがNested PCRが陽性にて、総合的に結核性髄膜炎と診断した。頭部MRIは造影T1強調像で髄膜の著明な造影所見はなかったが、造影FLAIR像ではびまん性に髄膜が造影され、治療後はほぼ消失していた。退院後は後遺症なく経過観察されている。

【考察】造影FLAIR像は造影T1強調像で検出できなかった髄膜炎の広がり、病勢を評価する上で非常に有用であった。

## 3 頭部MRI上Target signを示しToxoplasma脳症と鑑別を要した中枢悪性リンパ腫の1例

小池 佑佳・佐藤 朋江・大内 東香  
新保 淳輔・佐藤 晶・五十嵐修一  
橋立 英樹\*・棗田 学\*\*・佐々木 修\*\*  
岡本浩一郎\*\*\*

新潟市民病院脳神経内科

同 病理診断科\*

同 脳神経外科\*\*

新潟大学脳研究所脳神経外科\*\*\*

症例は57歳、女性。悪性リンパ腫に対する加療を受け、完全寛解にて退院後約1週間で急速に進行する意識障害を呈した。血液検査では炎症所見をみとめず、髄液検査も正常であった。頭部MRIでは両側大脳皮質、基底核、視床、両側小脳